
今日の出来事

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日の出来事

【Nコード】

N9258K

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

一緒にサッカーをやっているのに、なぜ選ばれないんだろう。

今日もメンバーに選ばれなかった。

この試合で2年で選ばれなかったのは俺と後二人だけ。後の二人は、明らかに体力が劣るから仕方ないにしても、もう本当にやめようかな。同じ練習をしてなぜ、レギュラーにならないんだらうか。

それでも、木田と俺ってそんなに変わらない気がするのに。

監督は俺の名前を呼んでくれない。サッカーを中学校からやってるのは、俺だって同じだ。しかも、同じ中学校から来たのが古見と木田だ。古見はうちの中学校でもエースだった。すると、高校でも身長がまた伸びて、今や180センチに届く勢いだ。すると、足まで速くなるんだよ。コンパスの差ってことか。俺は169センチしかない。小柄な上に何か秀でるものが無ければ、ヘディングで負けるからなあ。でも、木田は168センチ。俺より1センチ下なのに。今日の試合はあいつは呼ばれた。

何だか腐るよなあ。気分的に。

しかも、古見のアシストで、ゴールまで決めた。これでは、きっと次も出るんだろうなあ。俺は1年にも抜かれていく。

進学するんだから辞めるか、クラブ。成績まで負けてるよ。どこまで行っても勝てないってのは辛いよ。根性ないからな。

みんなより早く部室を出てきたのは、いささかしんどかったからだ。負け犬みたいで。今までなら木田が一緒だった。今日から俺が外された。木田が入ったのはレギュラーの布袋が骨折したから。布袋は中学校から全日本に選ばれるほどのスターだ。スターの座が古見になり、古見の座が木田になるのか。俺だけはいつまでもペーペーなんだ。

入学してから一緒の位置にいる時はよかったのか。俺ってやなやつだよ。

肩をすぼめて帰る途中、野田先生が本屋にいた。野田って、地味

な日本史の先生。この先生が教壇に立つと、静かに授業を始める。みんなはあまり聞かずに、自分の必要なことに時間を掛けていく。つまり、内職を始めるのだ。分かっていると思うが、注意もしない。俺たちの学校は結構進学校と言われてるから、あまり、騒いだり邪魔する奴はいない。そんな時間の無駄なことは誰もしないのだ。中学校ではひどかった。俺はそんなに頑張らなくても中学校の成績は良かった。だから、それなりに楽しかった。でも、勉強ができないというやつは、さらに騒いで、ますます学習から取り残される状況を作り出す。

親まで呼ばれて却ってしんどくなるんじゃないかと思うのに、エネルギーのある奴だよなあと変に尊敬してしまうほどだった。木田も俺と同じようなタイプだから、授業は真面目に受けていた。二人でサッカーを続けようと誓って、同じ高校に入り、昨日までは同じ立場だった。

だが、帰りに呼ばれたのは木田だった。

「明日、レギュラーに入れ」

監督はそう言って、木田にゼッケンを渡した。一瞬、俺は泣きそうになった。あわてて、顔を洗う振りをしたが、へこんだ。

『俺は？ 先生、俺はいつ出してもらえる？』

って聞きたかった。少年サッカーの頃ならきつと尋ねただろう。中学校では俺だって当然レギュラーだった。なのに、どこで、何が、変わった？

ふと、野田が読んでもるものが気になった。一心不乱に読んでいる。周りの雑音など聞こえないかのよう。

さりげなく隣に立って見た。野田の手には単行本。漫画ではない。

「先生、何読んでるんですか？」

「えっ、ああ、神田君か」

「なんか、すごい勢いで読んでますね」

「これ？ リーダーになるにはってハウツー本」

「はあ？ 何で」

「いや、君に話すまでもなく、僕は教員に向いてないからね。授業も聞いてもらえてないのはすぐわかるさ」

そうなんだ、先生は気付いてるんだ。

「君こそ、どうして？」

「いやあ、ちよつとクラブの帰り。予備校に行く気もなくて」

「そうか。でも、話しかけてくれるなんて嬉しいよ」

ここの本屋は隣のコーナーでコーヒーも飲める。野田は嬉しかったのか、俺に休んでいかなかったと言った。二人でコーヒーかよと思ったが、おごってくれるならまあいいかと、ついていった。

「僕はコーヒー、君は？」

「俺はアップルジュース。ところで先生、さっきの本、どうでした？」

「いやあ、無理だなあと思って読んでいたよ」

「先生は初めから先生になろうと思わなかったの」

「僕？ 僕はね記者になりたかったの。だけど、受けるところ片っ端から落ちて行って。それで、ついに教員になったのさ」

「ふーん、先生って歳はいくつなんですか」

「僕は35歳」

「ふーん、先生になって何年ですか」

「13年さ」

「楽しいですか」

「いやあ、ここ最近はしんどいさ。君みたいに話しかけてもらえることって皆無だからね。日本史は自分で勉強できるから、質問もないだろう。それに生徒指導って言っても、ここはみんな結構大人しいから。あまり僕が出ていくことってないよ。大塚先生が殆ど仕切ってくれるから」

「大塚先生は怖いからなあ。柔道の黒帯持ってるし」

「そうだね」

なんで、こんなに話してるのか分からない。でも、俺はどんどん落ち着いて、気持ちが晴れやかになって行った。あれほどむしゃく

しゃしてたのに。この先生は意外といいやつじゃないかな。知らなかったな。知ろうともしなかったけど。

「それで、神田君は何かあったのかい」

「うん、まあね。俺だけ、試合にだしてもらえないから」

「スポーツクラブってきついね。みんなの前で君はこっち、君はあっちって見えるから」

「うん、こっそりじゃないからね。こればかりは」

言いながら、おかしかった。先生は結構失礼なこと言ってるんだぜって思ったけど、何だかおかしくて笑っちゃった。

「いや、すまんすまん」

「いいですよ、先生。もう、どうでもいいことです」

「ごめんよ、こういうところがいかな」

「いや、先生。助かったよ、俺、今日は本当に家にも帰りたくなかったし、かつこ悪いってみんなに思われてしまっつて弱気だったから」

「いいやつだな、神田君は」

「そこで褒めるなよ。なんかなあ」

二人で1時間ほど話した後、俺は予備校に向かった。

木田が心配していた。

「おい、ここ、席取っておいたよ」

「よかったなあ、今日ゴール決まって」

「ああ、明日も一緒に行こうな」

「おう、俺もやるぜ」

「おう」

木田がホッとしてる。お前、いいやつだな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9258k/>

今日の出来事

2010年10月8日14時12分発行